2010 親子でまなぶ平和学習資料

第32集 私の戦争体験

編集後記

32年にわたって、この『私の戦争体験』をお届けしてきた機関誌委員会に、今年は戦争をじかに語ることのできる委員がいません。戦争を知らない私たちは、平和と経済発展の恩恵を受けて育ちました。常にどこかで紛争や戦いがくりかえされるこの世界において、実に稀有な65年の歳月が流れました。戦争を知る人たちの平均年齢はすでに75歳。伝えようとする方々にも、受け継ぐものたちにも焦燥感がつのります。

「お国のため」といって命を投げ出した人たちがいたことや、当時の常識や環境を含め、日本人のあり方を理解するのは容易ではありません。「戦争を知らない子ども」と「その子ども」たちは、どれほどの実感と気概をもって、平和学習に取り組めるのでしょうか。むごい戦時を生き抜いてこられた方の体験と、込められたメッセージに耳を傾けることが、平和な未来をになう我々の原点です。

ご寄稿いただきましたみなさま、耐えがたく辛い思いを越えて語っていただき、ありがとうございました。そしてこの冊子を手に取られたお母さんお父さん、子どもたちに読んであげてください。そして、いろいろなことを語り合ってください。何気ない日常の中で、それぞれが大切な人と向き合って、思いやり、しっかりと生活していく。その積み重ねが平和への第一歩だと信じます。

2010年 8月

大阪いずみ市民生活協同組合 機関誌委員会

くらしに笑顔お届けします
大阪いずみ市民生活協同組合
堺市堺区南花田口町2丁2番15号
0120-031-001（組合員サービスセンター）
発行責任者：藤井 克裕／編集：機関誌委員会
2010年8月

原爆の思い出

竹中　芳子（執筆時75歳）

今年も8月6日が来る。カッと日照りの強い、風もない真夏の日差しの空を見上げると、いとも簡単に原爆のあの雲が目の前に広がる。

昭和20年8月6日の8時過ぎ。そこらの物音がピタッと止まった。同時にピカッと光る物があった。まぁ今頃、誰かが写真のマグネシウムをたいて、何を写すのだろう。しかし、昼日中、暗くもないのになぜ…。頭の中にはまとまりのない、てんでばらばらの受け答えがよぎる。

開かれた窓から棒切れが飛んできて頭上から血がタラタラ。

それからは何もかも一瞬のことであった。何か大変な事態が起こったと気が付き、大きな爆弾だと思いついた。あわてて、生後1週間の赤ん坊の方へ行こうとするが、腰が立たなくて、立ってはしゃがみ、立ってはしゃがみ、やっとそこから斜めにある赤ん坊の部屋へ行けた。幸いにも赤ん坊は無事だった。

その後、4人の子どもと庭の防空壕（※①）にいたが、時間が経つにつれ家の中は散乱してきた。というのも爆心地（※②）と離れていたためか、波状的（※③）に爆風が来たとしか思えない。赤ん坊を探すときはまだ隣室との境の壁もあったのに、次に持ち出すべき物をとりに行くたび、爆心地の方の壁や障子が倒れてきて、その壁の向こう側の台所の食器棚や食品がおもちゃ箱をひっくり返したかのごとく、散らばって部屋の中に広がっていた。主食の配給のじゃがいも、とうもろこしの粉、サゴヤシの粉（※④）が、コップや茶碗のかけらと建物の壊れた物と混じって、もう今日からは生活をストップせよ！とばかりに何とも悲しい光景だった。

右隣の家の坊やは板塀にまたがってイチジクをもいでいたから、身体が吹っ飛ばされて、顔は片側を火傷した。左隣の家の女学校の娘さんは疎開（※⑤）先の片付けに出勤するため、校庭に一列に並んだまま被爆されたらしい。朝登校を誘いに来たその娘さんの友人が、ボロボロの衣類をつけたまま、隣家に立ち寄り「水をほしい」と言って、あえぎあえぎ出て行ったそうだ。その娘さんも自分の家までは帰れなかったと思う。隣家では夜暗くなるまで、奥様が玄関にふとんを敷いて待っていたと聞いた。

わが家ではその日の夕方、リヤカーで海岸沿いの丹那という部落に一室を借りて落ち着くことができた。被爆した翠町の家の天井は無事だったが、その後の8月頃の台風時には悲惨なものになり、隣組4～5軒はすべて空き家になった。被災者（※⑥）の死体を焼く臭いが当分忘れられず、火葬場の近くで過ごした幼少時代をぼんやりと思い出した。　そして一家中、1人も失わずに広島を去ったのは、その年の9月だった。私たちは感謝の念を持って広島の空のあの雲をいつも夢に見ている。

※①防空壕
敵方の航空機の攻撃から避難するために地下に造られた穴や施設。

※②爆心地
原子爆弾等の核兵器の爆発の中心地のこと。

※③波状的
波が寄せて返すように、ある間隔をおいて繰り返す様子のこと。

※④サゴヤシの粉
ヤシ科の仲間であるサゴヤシの幹中に蓄積されるでん粉のこと。主に東南アジアを中心に栽培されている。木の幹に1本当たり200～400kgをこえるたくさんのでん粉が蓄えられており、これを餅のように加工して食べる。

忘れてはならない！空襲のあの日、あの時

喜山　眞沙子（72才）

「八尾市の空から、猛火に包まれた大阪の空を見上げられ筆舌に尽くし難い～」と以前の戦争体験集を読んで、その当事者としての思いを新たにしました。

港区波除国民学校（※①）の1年生であった私は、親と離れて学童疎開（※②）を経験し、昭和20年3月14日港区の実家で空襲にあいました。

降り注ぐ焼夷弾（※③）に地獄の惨状を見ました。焼けている家並みを見ながらも〝自分の家だけは大丈夫〟とバケツリレーをしながら守っていた母と祖母。私は玄関で弟と泣き叫んでいました。その前を、全身火だるまになってよろめき、倒れ、泣き叫び、右往左往している人、人。道には死体が転がっていました。ほとんど車のない当時は馬車（※④）で運送をしており、馬が鳴きながら走り回っていました。「風下はダメだ！風上に逃げろ！」という声が今も耳に残っています。あくる日、焼け野原の中に見覚えのある石燈篭（※⑤）を見つけ、やっ

※⑤疎開
空襲、火災などの被害を少なくするために、集中している人口や建造物を分散すること。攻撃目標となりやすい都市に住む学童、老人、女性、または直接攻撃目標となるような産業などを分散させ、田舎に避難させる政策を指す言葉として一般化した。

※⑥被災者
地震・台風等の天災や、戦争や事故・事件等の人災にあった人のこと。

※①国民学校
日中戦争後に設けられ、初等教育と前期中等教育を行っていた学校のこと。6年の初等科と2年の高等科からなり、第二次世界大戦後に制定・公布・施行された学校教育法に基づいて初等科が新制の小学校、高等科が新制の中学校に変わるまで存在した。

※②学童疎開
第二次世界大戦末期において米軍による本土爆撃に備え、大都市の国民学校初等科学童をより安全な地域に一時移住させたことをいう。

※③焼夷弾
爆弾・砲弾の一種で、攻撃対象を焼き払うために使用する。発生する爆風や飛散する破片で対象物を破壊する爆弾と違い、焼夷弾は中に入っているもの（焼夷剤）が燃焼することで対象物を火災に追い込むのが目的。

とわが家の跡に辿り着きました。防空壕の中から半分焼けた物品を取り出し、煙臭い衣服を身にまとい、次の日には炊き出しに並んで薄い雑炊を口にしました。子どもの私には断片的にしか思い出せませんが、両親の心はいかばかりかと想像して、今でも涙してしまいます。

その後の疎開生活は惨めなものでした。子どもの私ができること、生活の足しにと毎日汽車が通った後の線路に行き、転がるコークス(※⑥)を弟と真っ黒になりながら拾い集めました。線路に咲く一輪の野の花を持ち帰り、瓶に生けました。母のにこやかな顔がそこにありました。今思うと、子ども心に少しの癒しを求めたのでしょうか。

父の仕事の関係で相生市に着の身着のままで移りましたが、経済的、精神的に両親の苦労は大変でした。自分の家庭を持ったときにはじめて分かった母の苦労でした。

修羅場(※⑦)をくぐってきた両親はさすがに強いです。父は92歳で昨年他界しましたが、私は現在、92歳の母の介護をしています。母は入退院を繰り返していますが、戦時中のこと、戦後のこと、今も脳裏に焼きつき、娘に介護されながら安泰な日々を感謝してくれています。

女学生の日記抜粋

浜尾　志津枝(78歳)

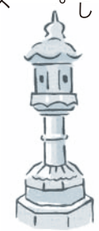
私は昭和19年4月5日、茨城県立石岡高等女学校に入学した。その日から自省録(※①)を書き始めて、21年6月26日までノート4冊の生活記録が手元にある。その部分を書いてみた。

12歳の私は「月月火水木金金」(※②)の歌を口ずさみながら銃後の守り(※③)に頑張っていた。

片道4里(※④)の県道を小桜村から石岡町まで8名が待ち合わせて集団登校した。道は雨が降ると泥道、寒い冬は薄氷が張って、すべって自転車ごとこけた。ペダルが折れて学校まで歩いたこともある。

※④馬車
馬や騾馬などの後ろに車をつけ、人や荷物を運搬する交通の手段のこと。

※⑤石燈篭
石製の灯籠のこと。社寺の献灯あるいは庭園の飾りとして用いられる。



※⑥コークス
石炭を乾留(蒸し焼き)した燃料のこと。蒸気機関車の燃料として使われていた。

※⑦修羅場
激しい闘争の行われている場所や、そのような場所を連想させる悲惨な戦場または事件・事故現場の状況のこと。

※①自省録
一日をかえりみて反省する日記。週ごとに先生に提出する。

※②月月火水木金金
土日返上で働くという意味を表す慣用表現。戦時中には、勤務礼賛の意味で国民の間で広く使われた。

※③銃後の守り
軍隊などで直接戦闘に参加するのではなく、軍需工場などで勤労し、軍隊が消費する資源・物資の供給を支えることで戦争の遂行と勝利を支援するという考え方。戦場の後方である、銃後で働くことを意味している。

※④里
「里」は尺貫法における長さの単位のこと。1里は、約4㎞。ここでは4里なので、約16㎞。

入学式の日、私の組の担任は体育の山口先生が代理をつとめていた。男の先生不足で、若い未婚の女先生ばかりで、入学して10日目に中年の先生は出征して行った。

19年5月31日、隣家の弘君のお父さんが出征するので朝4時に起きて見送った。この朝は町の中は兵士を見送る人でごったがえした。でも学校の授業は6時間あり、手旗信号(※⑤)も習った。終礼のときに落花生の配給(※⑥)があった。昨日から袋を作って待っていた人もある。私は祖母、母、妹たちと食べ、おいしかった。

19年6月5日(土)、鎌と籠を自転車に乗せて登校。草刈をした。翌日、先生が突然、養蚕農家(※⑦)へ行って、桑の木の皮むきをすると言った。国民学校の生徒に負けないように手が皮の渋で黒くなるほど一生懸命した。

19年6月13日、3〜4年生は挺身隊として日立の軍需工場(※⑧)へ行く。1〜2年生は勤労奉仕(※⑨)で学校へは行かないことになった。

19年6月22日、勤労奉仕は出征した農家の手伝いで、役場の人の案内があった。菜種を抜いて藁で縛る仕事だ。2年生が仕事を始める前に鉢巻をしてくれた。そして宮城遥拝最敬礼(※⑩)、次、青少年学徒に賜りたる勅語奉唱(※⑪)と号令した。慣れない農作業は7時30分頃から夕方4時まで続いた。手のひらに水ぶくれができてしまい、腰も痛くなった。4時になったので解放されて家に帰る。農家のお母さんは少し仕事が残ったので機嫌が悪かった。残さなければ良かったと反省した。

20年1月31日、今日は5、6時限とも防空訓練(※⑫)、その後焼夷弾にムシロをかける練習をした。

2月9日、3時に学校から駅へ英霊(※⑬)を迎えに行った。そのとき警報(※⑭)のサイレンが大きく鳴った。空襲で上空を艦載機が(※⑮)たくさん飛んでいく。家に帰ると祖母から花江と礼子が機銃掃射(※⑯)にあったと聞いた。3歳の幼児を狙うなんてと恐怖の話しは続いた。26日朝から空中戦(※⑰)、火を噴いて飛行機が落ちていく、あとに白い丸い物が浮い

※⑤手旗信号
紅白一組の旗を使い遠方(望遠鏡双眼鏡で見える範囲)への通信を行う手段。おもに音響が届きにくい海での活動で用いられ、現在でも海上自衛隊や海上保安庁などで使用される。

※⑥配給
統制経済の下で、不足しがちな物資の自由な流通を統制し、特定の機関を通じて一定量ずつ消費者に売ることや、品物などを割り当てて与えること。
配給制となったのは、米、味噌、醤油、塩、砂糖、マッチなどの生活必需品が主で、一人あたり何点と決められて配給切符が配布され、それと品物を交換していた。

※⑦養蚕農家
カイコ(蚕)を飼ってその繭から生糸(絹)を作る農家のこと。カイコのエサとなる桑も栽培していた。

※⑧軍需工場
武器・弾薬をはじめとする軍需品を、開発・製造・修理・貯蔵・支給するための施設のこと。

※⑨勤労奉仕
勤労によって社会や国家のために尽くすこと。戦時中は国の指導により学校でも行事として授業の中に取り入れられ、小学校でも従来から行われていた林からの木出し、麦踏み、ドングリ拾いなどに加えて村内農家への奉仕活動として麦刈り、稲刈りなどを行っていた。

ていた。落下傘だ。敵機だとみな喜んだ。

8月15日、志筑村の郵便局で玉音放送(※⑱)を聞いた。大勢の大人の人たちも直立不動の姿勢をとって待っていた。私は天皇陛下のお言葉はよく分からなかったが、局長が負けたことの説明をしたので、みなが泣いた。しかし、戦いは勝つと思って「ほしがりません、勝つまでは」を合い言葉に頑張っていた私だが、空襲がなくなり逃げまどわなくていいと思うと、楽な気持ちになったのを覚えている。

母から聞く戦争体験

竹本　美智子(65才)

今年89歳になる母は、戦争の話はほとんどしなくなりました。母から聞く戦争体験談は小説になりそうなほど苦しく、悲しい話ばかりで、思い出させてあげるのも可哀想に思います。

戦争が終わり、満州(※①)からの引き揚げ者で満杯の貨車。それに乗り遅れたら次はどうなるか分からない状況で、出発直前の貨車を目指して走る母と幼子3人と祖母がいたそうです。母と繋いでいた手が離れてしまった男の子を起こしてやる間がありません。母を呼び、泣き叫ぶその子を置いて貨車に辿り着き、やっとのことで乗車できたが、残された子を思い、その母と祖母は泣き続けていたそうです。「生涯、その泣き声は耳から離れないやろね」と母はポツリと呟き、涙していました。私も胸が張り裂けそうで、涙が止まりませんでした。どうぞその子が元気で生きて幸福であってほしいと祈ります。

昭和21年に満1才の私を連れて満州から引き揚げてきた両親に感謝です。

〈追〉

随分迷った末に、やはり書くことを決心しました。見知らぬ女性のこと。戦争とはいえこんなことがあっていいのだろうかと憤りと悲しみで胸が張り裂けそうになります。

終戦を告げられ、逃げる支度をして大勢の日本人が集合しているところへ、ソ連兵が押しかけ「女を出せ」と言い出し、えらいことになったと恐ろしさで生きた心地がしない中、一人の若い女性が「私が行きます」と言って出て行かれ、居合わせた全員が涙ながらに手を合わせたそうです。

その後、その方がどうなったのか誰も分かりません。きっと大切な人を亡くされて、たった一人異国の地で敗戦を迎え、失望のどん底にあったのか・・・。どんな思いで出て行かれたのかと思うと、怒りと悲しみで胸が張り裂けそうです。

涙なくして語れないことが戦争には山ほどあったそうですが、それもどんどん薄れていっている昨今、また戦争が何時起きてもおかしくない状況にあるように思います。二度と戦争なんか起こってほしくありません。起こさせてはなりません。戦争の恐ろしさ悲惨さを、もっともっと声を大にして世の中にアピールしなければならないと思います。私自身昭和20年6月生まれで、一つ間違えば残留孤児(※②)になっていたかもしれません。今幸せにくらせていることに感謝し、戦争反対を唱えていくことが自分の使命だと強く思っています。

ホンマの大阪大空襲～14才の春～

鉄砲　君子(80才)

昭和20年3月13日大阪本町。妊娠8カ月の姉の家に、母の代わりに手伝いに行ったときのことです。夕食の後、サイレンが鳴り響き、すぐ、家の前の防空壕へ。姉、姉の長男3才、私、近所の人でいっぱいです。その時「後藤さん家に落ちた！」と叫び声。壕から飛び出し、用水桶(※①)の水を頭から被り、火のついた1m以上もある焼夷弾を2階から放り出した。この壕

※⑩宮城遥拝
日本帝国憲法下の日本、大東亜共栄圏において、皇居(宮城)の方向に向かって敬礼(遥拝)すること。特に第二次世界大戦中には、天皇に忠誠を誓い、日本国民の戦意の高揚を図る目的で、宮城遥拝の動きは頂点に達した。

※⑪勅語奉唱
旧憲法下、天皇が直接に国民に下賜するという形で発した意思表示をつつしんで唱えること。

※⑫防空練習
空襲警報が鳴ったときに慌てず落ち着いて避難できるよう行っていた、予行演習のこと。

※⑬英霊
すぐれた働きをした人の死霊に対して敬意を込めて使う言葉。

※⑭警報
これから起こりうること、あるいは行ってしまったことに対する結果を告げることの一形態である。戦時中は警戒警報や空襲警報が発令されると、あちこちにサイレンが鳴り響いて人々に知らせた。

※⑮艦載機
軍艦に搭載されている航空機のこと。

※⑯機銃掃射
機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること。航空機が兵器として確立してからは、航空機に搭載された機関銃で上空から地上や海上の目標を攻撃するようになった。

※⑰空中戦
戦闘機などの飛行物体どうしが行う、上空における戦闘のこと。

※⑱玉音放送
天皇の肉声(玉音)を放送することをいう。特に1945年8月15日正午にラジオ放送された、昭和天皇による終戦の詔書の音読放送を指すことが多い。この玉音放送は、太平洋戦争における日本の降伏を国民に伝える意味を有した。

※①満州
日本が中国東北部3省および東部内蒙古(熱河省)を占領・支配して作り上げた傀儡(かいらい)＝あやつり国家。日本の敗戦によって消滅した。

※②残留孤児
第二次世界大戦末期のソ連軍侵攻と関東軍の撤退による中国東北部での混乱で、日本(いわゆる「内地」)に帰ることができず、中国大陸への残留を余儀なくされた日本人のこと。

では危ないので、すぐ横の住友銀行に避難することになり、家の物を2回ほど運んだ時、「ここは人が避難するとこや！」と怒られました。銀行の中で姉は裸足だったので、運んだ荷物の中にあった兄の靴下とトイレの下駄を履かせました。なぜか窓口に米や用水桶がありました。外が焼けているので、男の人たちがシャッターに水をかけるというジューンという音と湯気、もうここもこれ以上は危ないぞと女学校へと避難。教室でカンパン（※②）をもらったのが2日目でした。パサパサで食べられた物じゃなかったけれどありがたかった。甥には持ち出していた夕食のお櫃のご飯。姉は喜んでくれました。

そんな頃、平野にいる母は焼夷弾の落ちるのを見て、「花火みたいできれいやな」と思ったそうです。翌日、私たちを本町まで探しに行き、そこで見た焼け野原の地獄。悲痛の中、もう死んでしまったのかと覚悟し帰ったそうです。

私たちは母のいる平野の家に帰るために歩きました。歩ける道の横は死んでいる人。防空壕では生焼けの人が多く、今でも鮮明に焼きついているのは、金庫の前で、握った手の中の札束だけ焼け残り死んでいた女の人。子どもを抱いたままの人。丸太の木が焼けたように真っ黒焦げの死人。炭がカンカンにいこり、自転車は曲がりくねり、右や左、昼夜もはっきりしない黒雨の中、恵比寿町、新世界は折り重なり黒く積みあがった死人の山でした。これはもう一生忘れられない光景です。その中を歩き、天王寺から関西線の平野駅まで乗せてもらいました。昔は東住吉区平野。平野新町の母のいる家まで歩いて帰りました。艦載機の艦砲射撃（※③）にあったこともありました。

息子に代筆してもらい、読んでまた思い出すこともあり、辛い涙を流しました。今、姉も姉の子どもたちもまだ生きています。すごいことですね。幸せなのかと思う今日この頃ですが、生きていて良かったです。

※①用水桶
火災に備えて水をためておく桶のこと。

※②カンパン
パンの一種。含水量が少ないため貯蔵性が高く、非常食はもちろん軍隊や登山者の携行食糧として用いられる。

※③艦砲射撃
軍艦を浮き砲台として使用し、搭載された大砲で陸上の目標を海上から攻撃する方法のこと。

焦土に化して

日比野　正子（89才）

花嫁さんになる約束の私を東京から迎えに来た夫の姉と岐阜県東濃の小さな駅を出発したのは、昭和20年3月9日。中央線の夜行列車に身を託して満員で立ったまま着いたのは、御茶ノ水駅。夜も白々と明け始めたころだった。昨夜、大空襲があって東京の下町は火の海。家は本所（現・墨田区）なのに、ここからは列車も出ないという。おろおろとして泣く姉を励ましながら、とにかく歩き始めた。何キロ歩いたことか記憶もないが行けば行くほどの惨状で、道路に溢れた死者を跨ぎながらである。

見渡す限りの焼け野原はまだ炎が残っているのか、白煙黒煙が所々にあがっている。親子らしい家族5人が手を繋いだまま、また母親らしき人が赤ん坊をしっかり抱きかかえて背中は真っ黒に燃えてしまっている。姉は隣の人だというが、防火水槽（※①）に家族4人が頭を突っ込んで息絶えている。わが家はかなり大きい総2階の家だったが影も形もなく地下へ焼け崩れて、真っ赤な炎で近寄れない。姉の夫は？留守番の人は？人影もないので近くの小学校へ行ってみると、近所の人また知らない人、数人が見失った家族の名を呼びながら泣いている。「防火群長（※②）であるご主人は、姿の見えない人を探しに炎の中へ走っていかれた。『もうだめだぁっ』という大きな声を聞きました」とのこと。私は絶望と思った。諦めきれない姉と、その日から義兄を探し始めた。亀戸のガードの両隅三角（※③）のところは死者でうまっていて一番外側は黒々と焼死。次の層はちょうど魚の焼けたときのように手も足もそのままだがピンと伸ばしきっている。その下は圧死者（※④）なのか？美しい姿のままで義兄はいないかと探すが・・・。

次は隅田川。川の両岸浅瀬のところはぎっしりと死者で埋まっている。浮いてポカポカと流れてゆく人もある。欄干には数人が川面を向いてぶら下がっている。熱くてたまらない

※①防火水槽
消火栓が使用できなくなった場合に備え、地下に消火用の水をためた水槽。耐震性のある鉄筋コンクリートか、鋼製のものが多い。戦時中は空襲での火災に備えて、消火用の水をためておいた。

※②防火群長
空襲の際に地域の人々の安全を守るために働く、隣組のリーダーのこと。

※③両隅三角
両端の隅の角のこと。

※④圧死者
おしつぶされて死んだ人のこと。空襲で家屋が倒壊し、その柱や壁などにおしつぶされて死ぬ人も多かった。

ので飛び込もうとしたが、躊躇しているうちに焼死されたのか？「どこに何人、目の見えない人がいる」「どこに何人の死者がいる」と聞くたびに姉は行くというので数日は歩き回ったが、3月25日、形だけの結婚式を挙げてそのまま夫とは東と西に別れた。誠実なこの人を夫としてこの家族のために生き抜く決心をしたのである。

上京のとき、3月7日の乗車券を申込んであったのに9日になったので死を免れた私と姉である。

あの日、炎の中で死んだと思えば何でもできる。よく今まで生きてこれたと思う。あの焼け野原には水一滴もなかったのに、「先祖様のお世話になりましたので」と、次々と私たちの衣食住を賄ってくれた人たち。人のおかげさま、先祖のおかげさまも知ったことである。みんなで助け合ってくらすこと、世界の平和を願うこと、ひたすら思う私である。

〈附記〉

この期に聞いたことであるが、昭和20年3月10日の東京大空襲(※⑤)はマリアナ基地から270機のB29爆撃機飛来。10日0時7分から2時間50分にわたって37万2千発の焼夷弾を投下とのこと。死者10万人。深川区のみでも3万人死亡とのことでした。

深川の重願寺という私の菩提寺においては住職夫婦、家族、寺に働く人、寺はもちろん全部焼死、焼失にて、小学校5年生の男児1名が学童疎開で生き残られました。珍しいことではありませんでした。次に私の知人ですが、子ども5人を連れて逃げる途中、背中の赤ちゃんに炎が飛んできて燃え始めたので、背から下ろして炎の燃え盛っているとこへ投げ込んだそうです。他の子ども4人は無事だったけれど、あの泣き声が一生、耳を離れないと言われ、悲しんでおられたと聞きました。また満州から引き揚げる際、知らぬ間に背中の4才の女児が亡くなっていたとか。栄養失調とのことでした。

※⑤東京大空襲
1945年(昭和20年)に入ると、米軍は一般市民への都市爆撃を大々的に開始。100回を超える無差別爆撃で東京市街地は6割を消失、住民の半数近くが家を焼け出された。

核不拡散条約(NPT)再検討会議に、いずみ市民生協の代表として参加しました！

国際署名「核兵器のない世界を」
原水爆禁止日本協議会の安井理事に
手渡しました

国連本部の原爆展にて
折鶴づくりの指導をしました

コロンビア大学にて
被爆者の証言活動を行ないました

みなさんから受け取った平和への思いをニューヨークに届けました。

この貴重な出会いや体験を糧に、平和活動を続けていきます。

左から 赤穂郁子理事、
中川裕紀子委員長、
木矢由佳委員長、
川端征子理事

核兵器廃絶を訴えていくことが責務だと感じました。

たくさんの組合員の思いを背に、被爆者の方と共に行動し、貴重な体験をしました。

ニューヨーク／タイムズスクエア付近にて
市民集会とパレードに参加しました

国連本会議を傍聴しました

核不拡散条約(NPT)再検討会議の結果について

2010年核不拡散条約(NPT)再検討会議は5月28日、全会一致で最終文書を採択し、閉幕しました。

最終文章では、「核軍縮」・「核不拡散」・「原子力の平和的利用」について、64項目の行動計画が盛り込まれました。

【成果】

①全会一致で採択
2000年会議で合意された核保有国による「核廃絶への明確な約束」を再確認し、最終文章の採択に至りました。

②核軍縮について
5年ごとに、核保有国の核軍縮進捗状況を点検・検証するしくみができました。

③核不拡散について
イスラエルやイランが存在する中東地域に、核兵器や大量破壊兵器のない地帯を創設するための国際会議を、2012年、アメリカ・イギリス・ロシアと国連の共催で開催することが決定しました。

④「核兵器禁止条約」に言及
核兵器そのものを不法とする「核兵器禁止条約」構想に初めて言及しました。

【不十分な点】

①核兵器廃絶の期限や、核廃絶への行程表策定は見送られました。

②核不拡散体制強化のためのIAEA(国際原子力機関)による抜き打ち査察を可能にする方策も見送られました。

核兵器廃絶へ向けた具体的な行動計画を決定したことは、今後へ向けての大きな一歩です。「核兵器のない世界」を実現させましょう！